

コハゼをかけることを面倒がつて、突ツかけ足袋とでもいふべき姿で室内に起坐せられた有様なども、屢々人の目に觸れたことであらう。凡そ普通にいふ「無精」は、學者の通有性ともいふべきで、博士も日常可なりの無精組であつたことは争はれない。併し一旦、史料の採集といふやうなことになる、この無精は忽ち一變して、常人の驚嘆する程にマ、メに立ち廻られたものである。書齋に講壇に、あの悠揚たる博士の態度風貌に接した人は、恐らく這般の消息を想像し得ないであらう。

明治四十五年三月、史料採訪の目的で渡滿せられた博士は、奉天文溯閣の四庫全書を調査し、その中の未刊書の何程かを謄寫すると共に、宮殿内に藏する滿文老檔を寫眞する計畫を立てられた。この事業の進行を助ける爲に、余もまた大學から派遣せられ、四月初めに赴奉した。ところが着いて見ると、當時の東三省總督趙爾巽氏から、寫眞の許可がまだ出て居らず、博士自から毎日交渉を重ねられても一向に埒が明かないで、毎日手を束ねて應諾を待つより外致方ない有様であつた。あの革命の騷はこの年の末に起つた事件であるが、四月頃にはまだ清朝の權勢が四百餘洲を壓して居つた時であるから、外人が清室の記録を寫すといふやうなことに、相當困難が伴つたことはいふまでもない。そこで博士と余とは一策を案出した。それは同じ宮殿内に五體清文鑑といふ辭書が藏せられて居る。滿・蒙・藏・漢の四語を對譯した四體清文鑑までは刊行せられたけれども、これに回語即ち新疆省のトルコ語を加へ、清國五大民族の言語を悉く對照したものは、乾隆帝の大抱負に依つて美事に編纂せられたけれども、まだ刊行を見るに至らなかつた。その寫しが一部この宮殿に藏せられて居るのがこの五體清文鑑である。誠に貴重すべき言語資料で、これを寫し撮ることはまた吾々の熱心なる希望であつた。そこでこの書を寫眞する許可を願つて、